

波介川河口導流事業に伴い発見された護岸遺跡の構造と保存に関する考察

富永 剛史

要 旨

一級河川仁淀川水系波介川の土佐市内の浸水対策として、現在波介川では、河口まで延伸する波介川河口導流事業が実施されている。この事業の中で、工事と平行に実施している埋蔵文化財調査において、仁淀川の旧堤防の下面より、古い護岸遺跡が発見された。

この新居護岸遺跡は、埋蔵文化財の調査によると、江戸時代初期に構築された護岸と推測され、野中兼山が関わっている可能性もあると言われている。護岸遺跡は、太閤堤（京都・宇治川）が有名であるが、城の石垣と違い全国的に発掘事例も少なく、今回の発見は全国で2例目の護岸遺跡の発見とも言われている。故に、本護岸遺跡は、石積護岸の歴史と構造を知る上で貴重な役割を持っている。

土木の観点から見ても、先人の石積技術や護岸構造を知ることは貴重なことであり、土木技術、施工、品質の向上のためにも重要なことと考える。

本論文は、波介川河口導流事業に伴い発見された、上ノ村護岸遺跡（石積護岸）の構造を検証し、昔の石材の加工技術、石積の施工方法、護岸の構造、基礎の構造を土木の観点から研究する。また、波介川河口導流事業の事業工程を遅らせないための、上ノ村護岸遺跡の保存方法について提案するものである。